

●ヨハン・シュトラウス二世 (1825~99) / シェーンベルク 編曲
『皇帝円舞曲』作品437
 (室内アンサンブル用編曲) (1888/1925)

1925年、シェーンベルクは、弟子で後にスペインを代表する作曲家となるロベルト・ジェラルド(1896~1970)が企画した「ウィーン音楽祭」に出演することになった。全集の批判校訂報告書によると、4月22日にジローナ、26日と29日にバルセロナでの室内楽の演奏旅行のために、シェーンベルクはヨハン・シュトラウスの『皇帝円舞曲』を編曲した。モーツァルトやベートーヴェン、シェーンベルクの作品を軸にした2つの演奏会に続いて、「アルノルト・シェーンベルク祭」と題された演奏会では、『月に憑かれたピエロ』ほか演奏された。それらの3つの演奏会すべてのプログラムに『皇帝円舞曲』を入れることによって、シェーンベルクは、ヨハン・シュトラウスをウィーンの音楽の伝統の中に位置付けたのである。

シェーンベルクがヨハン・シュトラウスの作品を編曲したのはこの時が初めてではなかった。第一次世界大戦が終結した1918年にシェーンベルクは「私的演奏協会」を設立したが、1921年5月27日に財政立て直しを目的に特別演奏会「ワルツの夕べ」を開催した。その際に、シェーンベルクは『入り江のワルツ』と『南国のバラ』を編曲していた。スペイン演奏旅行のために編曲した『皇帝円舞曲』では、より音楽的な工夫がみられる。とりわけ注目されるのは、対旋律にオーストリア=ハンガリー帝国の国歌であった『皇帝賛歌』を忍び込ませ、第一次世界大戦で消滅した帝国の象徴を透かしとして刻み込んでいる点である。

Fl / Cl - Pf - String Quartet

初演 1925年4月22日 テアトロ・プリンシパル(スペイン、ジローナ)
 フランツ・ヴァングラー(フルート)、ヴィクトール・ポラトシエック(クラリネット)、フリードリヒ・ヴェーラー(ピアノ)、ルドルフ・コーリツシュ/フリッツ・ロートシルト(ヴァイオリン)、マルセル・ディック(ヴィオラ)、ヨアヒム・ストウチェウスキー(チェロ)

●アントン・ヴェーベルン (1883~1945)

室内オーケストラのための6つの小品
作品6 (1909/20)

1913年3月31日、ウィーン楽友協会の大ホールでシェーンベルク指揮のウィーン演奏協会管弦楽団(現・ウィーン交響楽団)の演奏会が開催された。この演奏会はスキャンダルとなり、多くの新聞で報道され、なかには風刺画付きのものもあった。この時にヴェーベルンの『大オーケストラのための6つの小品』は初演された。

シェーンベルクは、いくつものスキャンダル演奏会を経て、批評家などジャーナリストを締め出した、会員限定の非公開の演奏会シリーズ「私的演奏協会」を設立した。会員以外にも開かれた「宣伝演奏会」のために、『6つの小品』は室内オーケストラに編曲された。1921年1月23日、ヴェーベルンの指揮で初演され、1月31日の例会、さらに翌年5月12日と23日の例会でも演奏された。

『大オーケストラのための6つの小品』は1909年に作曲されたが、初演前にヴェーベルンがシェーンベルクに宛てた手紙によれば、1906年に亡くなった母の死に関連した体験と結び付いている。希望をもちつつ不幸の予感にかられる第1曲に始まり、「葬送行進曲」と題された第4曲では葬儀の際の感情が、第5曲と第6曲では墓参りが描かれている。音楽的にはシェーンベルクの『5つの管弦楽曲』をモデルとし、音色の変化が特徴となっている。編曲に際して、金管楽器やティンパニなどがハルモニウムとピアノに割り当てられ、室内オーケストラならではの作品になっている。

Fl (Picc / A-Fl) / Ob / Cl (Es-Cl) - 4 Perc (Cym / Bass Drum / Rute / Tam-Tam / Bells / Tri / Glock) - Harmonium - Pf - Vn I / Vn II / Va / Vc / Cb

初演 1921年1月23日

●アルバン・ベルク (1885~1935) / ワーヘナール 編曲

『アルテンベルク歌曲集』作品4

— 絵葉書へのペーター・アルテンベルクの詩による

5つの管弦楽伴奏歌曲

(室内アンサンブル用編曲) (1912/85)

1913年3月31日のスキャンダルとなった演奏会で、ベルクの『アルテンベルク歌曲集』の第2曲と第3曲も初演された。この日の演奏会の前半では、ヴェーベルンの『大オーケストラのための6つの小品』やシェーンベルク『室内交響曲第1番』の演奏中に、聴衆が口笛を吹いたり、叫んだりして、すでに騒然としていた。休憩後、ベルクの曲が演奏され始めると、再び騒ぎ始めた聴衆に対して、シェーンベルクは指揮を中断し、静かにしない観客に対して会場から去ってくれと叫んだ。すると聴衆がさらに騒ぎ出し、警察が介入し、プログラムの最後のマーラーの『亡き子をしのぶ歌』は演奏されずに、演奏会は中断された。

ベルクは、初めてのオーケストラを伴う作品であった『アルテンベルク歌曲集』が聴衆に受け入れられず、さらに同年6月にシェーンベルクがこの曲集を非難したことから、再び演奏しようと考えなかった。ただし第5曲は、1917年にアルマ・マーラーとその娘アンナへのプレゼントとして、声楽なしでピアノ、ヴァイオリン、チェロ、ハルモニウムのために編曲され、1921年には雑誌『人間』の特集「若き音楽芸術」のなかでピアノ・ヴォーカル・スコアとして発表された。

全曲の初演は、ベルクの死後、1951年に行われた。本日、演奏されるのは、ベルク没後50年の1985年にシェーンベルク・アンサンブルから委嘱されて、オランダの作曲家ワーヘナールによって編曲されたものである。

Gesang - Fl (Picc) / Ob / Cl / Fg - Hrn - Harmonium - Pf - Vn I / Vn II / Va / Vc / Cb

初演 1985年12月12日 アムステルダム・コンセルトヘボウ 小ホール

ジャード・ヴァン・ネス(アルト)、シェーンベルク・アンサンブル

委嘱 シェーンベルク・アンサンブル

※歌詞対訳：56~57頁をご覧ください。

●アルノルト・シェーンベルク (1874~1951) / グライスレ 編曲

5つの管弦楽曲 作品16

(室内オーケストラ用編曲) (1909/25)

1909年に作曲された『5つの管弦楽曲』は、第3曲がシェーンベルクの『和声学』(1911)で述べた「音色旋律」を実践した作品として知られる。全曲の核となる第3曲では、様々な楽器が次々交代し、移り変わる音色によって幻想的な世界が立ち現れる。

大オーケストラのためのこの作品を、シェーンベルクは、1920年に「私的演奏協会」のプラハでの演奏会のために室内オーケストラ用に編曲した。室内オーケストラのための『5つの管弦楽曲』は2月25日にウィーンでの「私的演奏協会」の公開リハーサルを経て、3月13日の演奏会で初演された。しかし、この編曲は出版されず、弟子で娘婿のフェリックス・グライスレ(1894~1982)が編曲したものが、1925年にペータース社から出版された。グライスレの編曲には、ホルンが入っているものの、シェーンベルクの編曲が基礎となっている。

1912年の出版の際に、ペータース社から『5つの管弦楽曲』の各曲にタイトルを付けるように要望されていることがシェーンベルクの日記に残されているが、最終的には記されなかった。しかし、1925年のグライスレの編曲では各曲にタイトルが付けられ、第3曲にはサブタイトルとして「湖畔の夏の朝」と記されている。一方、シェーンベルク編曲のプラハで初演の際のプログラムでは、具体的に「トラウン湖の朝」と書かれていた。トラウン湖は、作曲の前年の夏にシェーンベルクが妻と友人の画家ゲルストルとともに訪れ、2人の不倫を知った場所である。つまり、第3曲は、その時のシェーンベルクの心象がトラウン湖とともに描かれていると言えるだろう。

Fl (Picc) / Ob / Cl / Fg - Hrn - Harmonium - Pf - Vn I / Vn II / Va / Vc / Cb

●グスタフ・マーラー (1860~1911)

『子供の不思議な角笛』より

「番兵の夜の歌」(グラール 編曲)

「この世の生活」(ティドロロー 編曲)

「塔の中の囚人の歌」(ティドロロー 編曲)

(室内アンサンブル用編曲) (1892~93、98/2021)

マーラーはシェーンベルクが崇拜する作曲家であった。2人が直接会ったのは1903年、シェーンベルクの弦楽六重奏曲『浄められた夜』のリハーサルの時であった。このときにマーラーは彼の才能を認め、親交を深めていく。有名なエピソードに、1907年にはシェーンベルクの弦楽四重奏曲第1番と『室内交響曲第1番』の初演中に野次を飛ばす聴衆に対して、客席にいたマーラーは擁護する態度を示したというものがある。一方、シェーンベルクは、マーラーが亡くなった1911年に『和声論』を出版したが、この著作を「マーラーの思い出に」と献呈した。

当然のことながら、マーラーの作品は「私的演奏協会」のプログラムで重要な位置を占めることになった。交響曲では、ピアノ1台4手用に編曲された第6番と第7番や、同協会のためにエルヴィン・シュタイン(1885~1958)によって室内オーケストラ用に編曲された第4番がたびたび登場している。また歌曲集もとりあげられている。ただ、マーラー自身がピアノ伴奏とオーケストラ伴奏の2つの稿の両方を残している場合がある。『さすらう若人の歌』は、シェーンベルクがオーケストラ伴奏稿に基づいて、室内オーケストラ用に編曲して演奏された。『子供の不思議な角笛』からは6曲がピアノ伴奏稿で取り上げられた。そのなかに「番兵の夜の歌」と「塔の中の囚人の歌」が含まれていた。本日は、この2曲と「この世の生活」が、2人のカナダの作曲家グラールとティドロローによって室内アンサンブル用に編曲されて演奏される。いずれもクラングフォルム・ウィーンから委嘱され、今年6月29日にウィーンで世界初演されたばかりである。

「番兵の夜の歌」は、真夜中に寝ずに番をしている兵と、幻の

恋人との対話による曲で、音楽的にも行進曲風の部分と、甘美な旋律的な部分によって対比されている。ただし、詩の最後では本来現れるはずの幻の恋人ではなく、仲間の番兵が登場する。編曲に際して、グラールは器楽による自然界の夜の風景を付け加え、そこでは蛙や鼻、森鳩の鳴き声が描写されている。

「この世の生活」と「塔の中の囚人の歌」はティドロローによって編曲されている。「この世の生活」は、飢えた子どもとその母親との対話による曲。もともと『子供の不思議な角笛』に収められる予定だった「天上の生活」との対比が想定されていた。この曲は最終的に交響曲第4番の終楽章で用いられたが、構想段階では「この世の生活」は第2楽章に置かれていた。「塔の中の囚人の歌」は、「思うことならなんでも自由」を繰り返し叫ぶ囚人と、牢獄の前で彼を慕う乙女との対話による曲で、音楽的にも軍楽的な力強い部分と甘えるような旋律的な部分によって対比されている。

●番兵の夜の歌

Bar - Fl (Picc) / Ob / Cl / Bs-Cl / Contraforte - Hrn / Trp / Trb - 2 Perc (Dove Call / Glock / Vib / Snare Drum / Cuckoo Call / Crotales / Tubular Bells / Waldteufel / Timp / Bird Whistle / Tam-Tam / Bass Drum / Symphonic Cym / Police Siren) - Harmonium (Frog Guiro) - Pf (Cel / Frog Guiro) - Hrp - Vn I / Vn II / Va / Vc / Cb

●この世の生活

Voice - Fl / Ob / Cl / Bs-Cl / Fg - Hrn / Trp / T- Trb - 2 Perc (Tubular Bells / Vib / 2 Concert Bass Drums / Bongos / Crotales / Thunder Sheet / Timp / Glock / Symphonic Cym / Cym / Tom-Toms / Tam-Tam) - Hrp - Pf - Harmonium - Vn I / Vn II / Va / Vc / Cb

●塔の中の囚人の歌

Voice - Fl / Ob (E-Hrn) / Cl / Bs-Cl / Fg - Hrn / Trp / T- Trb - 2 Perc (Vib / Concert Bass Drum / 2 Tom-Toms / Wood Block / Crotales / 2 Snare Drums / Cym / Timp / Glock / Bongos) - Hrp - Pf - Harmonium - Vn I / Vn II / Va / Vc / Cb

初演 2022年6月29日 ウィーン・コンツェルトハウス モーツァルトザール
バス・ウィーヘルス(指揮)、トーマス・ハンブソン(バリトン)、クラングフォルム・ウィーン
委嘱 クラングフォルム・ウィーン

※歌詞対訳: 58~60頁をご覧ください。

[にしむら おさむ (音楽学)]

Alban Berg: Altenberg-Lieder, Op.4

Seele, wie bist du schöner, tiefer, nach Schneestürmen.
Auch du hast sie, gleich der Natur—
Und über beiden liegt noch ein trüber Hauch, eh' das Gewölk sich verzog!

Sahst du nach dem Gewitterregen den Wald?!?!
Alles rastet, blinkt und ist schöner als zuvor—
Siehe, Fraue, auch du brauchst Gewitterregen!

Über die Grenzen des All blicktest du sinnend hinaus;
Hattest nie Sorge um Hof und Haus!
Leben und Traum vom Leben, plötzlich ist alles aus...
Über die Grenzen des All blickst du noch sinnend hinaus!

Nichts ist gekommen, nichts wird kommen für meine Seele—
Ich habe gewartet, gewartet, oh gewartet!
Die Tage werden dahinschleichen, und umsonst wehen meine aschblonden,
seidenen Haare um mein bleiches Antlitz!

Hier ist Friede. Hier weine ich mich aus über alles!
Hier löst sich mein unfafbares, unermeßliches Leid,
das mir die Seele verbrennt...
Siehe, hier sind keine Menschen, keine Ansiedlungen...
Hier ist Friede! Hier tropft Schnee leise in Wasserlachen...

ベルク 『アルテンベルク歌曲集』作品4

心よ、おまえは吹雪のあとではさらに美しく、深い。
きみも自然と同じように吹雪をもっている。
そしてこのふたつの吹雪をほの暗くつつむものがある。雷を呼ぶ雲が消え去ってしまうまでは!

きみは夕立のあとの森を見たか?!?!
すべてはやすらぎ、かがやき、まえよりも美しい。
ほら、女よ、きみも夕立を必要としている!

きみは宇宙の果てを冥想し、見はるかし、
家や雑事を思い煩うことはなかった!
この世に生きることも、その夢も、すべては不意に意味を失った...
きみはいまなお宇宙の果てを冥想し、見はるかしている!

わたしの心に訪れるものはなく、これからもないだろう...
わたしは待ちに待ち、ああ——待ちつづけた!
日々はひっそりと過ぎ去ってゆくだろう、そしてわたしの絹のような灰色がかかった金髪は、
むなしくわたしの青ざめた顔をなぶっている!

ここにはやすらぎがある。ここでわたしは心ゆくまで泣き明かした!
ここでわたしの心を焼く、はかり知れぬほど
深い苦しみが消える...
ほら、ここにたたずむものはなく、また訪れるものもない...
ここにやすらぎがある! 雪が音もなく水たまりに降るここに...

[喜多尾道冬 訳]

Gustav Mahler: Des Knaben Wunderhorn

Der Schildwache Nachtlid

“Ich kann und mag nicht fröhlich sein;
Wenn alle Leute schlafen,
So muß ich wachen,
Muß traurig sein.”

“Ach Knabe, du sollst nicht traurig sein,
Will deiner warten,
Im Rosengarten,
Im grünen Klee.”

“Zum grünen Klee, da komm ich nicht,
Zum Waffengarten
Voll Helleparten
Bin ich gestellt.”

“Stehst du im Feld, so helf dir Gott,
An Gottes Segen
Ist alles gelegen,
Wer's glauben tut.”

“Wer's glauben tut, ist weit davon,
Er ist ein König,
Er ist ein Kaiser,
Er führt den Krieg.”

“Halt! Wer da? Rund! Bleib' mir vom Leib!”
“Wer sang es hier? Wer sang zur Stund?”
Verlorne Feldwacht
Sang es um Mitternacht. Mitternacht! Feldwacht!

Das irdische Leben

“Mutter, ach Mutter! es hungert mich,
Gib mir Brot, sonst sterbe ich.”
“Warte nur, mein liebes Kind,
Morgen wollen wir ernten geschwind.”

マーラー 『子供の不思議な角笛』より

番兵の夜の歌

「ほくがうれしくたのしいわけがない!
だってだれもが寝ているときに、
起きていなければならぬ、
悲しいばかりだ!」

「いとしいひと、悲しむことはないのよ!
わたしはあなたを待っていますから、
ばらの咲く庭で、
みどりなす野原で!」

「みどりの野原などへ行けはしない!
槍や鉾の林立する
武器でいっぱい庭で、
番をしなくてはならないからだ!」

「そこに神さまのご加護がありますよう!
すべては神さまの
御心のまま!
神さまを信ずるひとには!」

「それを信ずるひとは遠いところにいる!
それは王さまだ!
それは皇帝だ!
皇帝が戦を行うのだ!」

「だれだ! とまれ! 巡邏だ! 寄るな!」
「こんな夜中に歌っていたのはだれだ!」
戦死した番兵なのだ、
真夜中に歌っていたのは!

この世の生活

「母さん、お母さん、お腹が空いたよう!
パンをちょうだい、でなきゃ死んじゃうよう!」
「待っておくれ、もうちょっと、いい子だから、
あした大急ぎで麦を刈るからね!」

Und als das Korn geerntet war,
Rief das Kind noch immerdar:
“Mutter, ach Mutter! es hungert mich,
Gib mir Brot, sonst sterbe ich.”
“Warte nur, mein liebes Kind,
Morgen wollen wir dreschen geschwind.”

Und als das Korn gedroschen war,
Rief das Kind noch immerdar:
“Mutter, ach Mutter! es hungert mich,
Gib mir Brot, sonst sterbe ich.”
“Warte nur, mein liebes Kind,
Morgen wollen wir backen geschwind.”

Und als das Brot gebacken war,
Lag das Kind auf der Totenbahr.

Lied des Verfolgten im Turm

Der Gefangene:
Die Gedanken sind frei,
Wer kann sie erraten?
Sie rauschen vorbei
Wie nächtliche Schatten.
Kein Mensch kann sie wissen,
Kein Jäger sie schießen;
Es bleibet dabei,
Die Gedanken sind frei.

Das Mädchen:
Im Sommer ist gut lustig sein
Auf hohen wilden Heiden,
Dort findet man grün Plätzelein,
Mein herzverliebttes Schätzelein,
Von dir mag ich nicht scheiden.

Der Gefangene:
Und sperrt man mich ein
Im finstere Kerker,
Dies alles sind nur
Vergebliche Werke;

そして麦刈が終わったときも、
子どもは叫びつづけていた、
「母さん、お母さん、お腹が空いたよう、
パンをちょうだい、でなきゃ死んじゃうよう!」
「待っておくれ、もうちょっと、いい子だから、
あした大急ぎで麦打ちをするからね!」

そして麦打ちが終わったときも、
子どもは叫びつづけていた、
「母さん、お母さん、お腹が空いたよう、
パンをちょうだい、でなきゃ死んじゃうよう!」
「待っておくれ、もうちょっと、いい子だから、
あした大急ぎでパンを焼くからね!」

そしてパンがやっとなら焼けたとき、
子どもは死んでしまっていた!

塔の中の囚人の歌

囚人:
思うことならなんでも自由、
その邪魔はできない。
それは夜の亡霊のように
ふわっと消えてゆく、
だれの眼にもとまらない、
狩人でも射止められない、
まったくありがたいことに、
思うことならなんでも自由!

乙女:
夏になればとても気持ちがいい、
高くて涼しいお山で過ごせるなら。
青々とした草地のあるところで。
ほんとに大好きなあなた、
そこでいつまでも一緒にいたい。

囚人:
ぼくは暗い牢獄のなかに
閉じ込められている、
そんなことをしても
まったく無駄というもの。

Denn meine Gedanken
Zerreißen die Schranken
Und Mauern entzwei,
Die Gedanken sind frei.

Das Mädchen:

Im Sommer ist gut lustig sein
Auf hohen wilden Bergen;
Man ist da ewig ganz allein,
Man hört da gar kein Kindergeschrei,
Die Luft mag einem da werden.

Der Gefangene:

So sei es, wie es will,
Und wenn es sich schicket,
Nur alles in der Still;
Und was mich erquicket,
Mein Wunsch und Begehren
Niemand kann's mir wehren;
Es bleibet dabei,
Die Gedanken sind frei.

Das Mädchen:

Mein Schatz, du singst so fröhlich hier
Wie's Vögelein in dem Grase;
Ich steh so traurig bei Kerkertür,
Wär ich doch tot, wär ich bei dir,
Ach, muß ich denn immer klagen.

Der Gefangene:

Und weil du so klagst,
Der Lieb ich entsage,
Und ist es gewagt,
So kann mich nicht plagen.
So kann ich im Herzen
Stets lachen, bald scherzen;
Es bleibet dabei,
Die Gedanken sind frei.

だってぼくの思いは
牢獄の柵をすり抜け、
壁を突き破ってしまうからだ、
思うことならなんでも自由！

乙女:

夏になればとても気持ちがいい、
高くて涼しいお山で過ごせるなら。
そこならいつもふたりきりでいられる、
子どもの叫び声も聞こえてこない！
気持ちがとても広々とするわ。

囚人:

このままがいちばんよい、
このままでよいのなら、
このままそっとしておいてほしい、
ただそっとしておいてほしい！
ぼくの心の望みと願いを
だれも邪魔することはできない！
まったくありがたいことに
思うことならなんでも自由！

乙女:

いとしいひと、野原の小鳥のように
あなたはここでたのしげに歌っている。
わたしは牢獄の入口で悲しみに暮れている、
あなたのそばにいられるなら死んでもいい、
ああ、いつまでこんな風に苦しまねばならないの。

囚人:

きみがそんなに苦しむなら、
いっそ愛など諦めてしまおう！
愛さえ諦めることができれば
ほかに苦しむことなどありはしない！
そうすれば心のなかでいつでも
笑ったり冗談を言ったりしていられる。
まったくありがたいことだ、
思うことならなんでも自由だから！